

## 灌頂撰『涅槃經玄義』における「有る人」とは誰れを指すか

河村孝照

### 一 問題の所在

灌頂の涅槃經玄義は、吉蔵の涅槃經遊意と対応する部分が多い。それは両著を一読してわかることである。両著とも短文であるが、ほぼ三分の一度、対応部分がある。中でも涅槃の体を論ずるところ、また涅槃の用を論ずるところにおいて特に多く対応する。

対応部分は当然の事として両著において同じ素材があげられている。つまりこのことは、灌頂は吉蔵の遊意を参照して玄義を著わしたのか、あるいはその逆に吉蔵は灌頂の玄義を参照して遊意を著したのか、それとも、灌頂も吉蔵も、第三の著作を参照したものか、その何れかであることを示しているものである。このことの断定は灌頂の涅槃學、ないしは天台學において重要な意味をもつものである。

最近、平井俊英博士は、『法華文句の成立に関する研究』と題する著書を公けにせられ、法華文句の成立において、吉

蔵の著作を大いに参考としたものであることを、文献的に明らかにせられた。これは、文句が灌頂の筆録にかかるものであるにも拘わらず、恰も智顛は法華教學において吉蔵の著作に拠る所多しという印象を強く与える点において、手続上の不備を痛感するものであるが、然し当時の教界の一斑を現わすものとして興味深い。

本研究にあつては、直接、灌頂の著作と吉蔵の著作との対応関係の検討である。前述したように三の場合が考えられるが、そのうち何れの場合であるかを決定するものは、玄義の中に示されている「有る人」は誰れであるかを指示することが重要な要素の一つである。玄義の「有る人」は吉蔵を指す場合の公算がきわめて大きい。この「有る人」が例外なく遊意の吉蔵に相当すれば、灌頂は吉蔵の遊意を参考として玄義を著わしたということがいえる訳である。

二 兩者の対応部分と玄義中の「有る人」の位置

対応文中の玄義に「有る人」は四回ほど挙げられている。然もこれが皆な吉蔵の遊意と同文の部分において存在する。そこでまず玄義と遊意とにおける顯著な対応例の一部を示しつつ、「有る人」がどのようなところにおいて説かれているかを示してみよう。上段が灌頂の玄義であり下段が吉蔵の遊意である。

(一) 涅槃無名について

三釈無名者。先出旧解。一云。真如實際等是真諦名。仏果涅槃常樂我淨等は俗諦名。而言涅槃無名者。無生死患累之名而有美妙之名也。引互無為証。涅槃無生死之名。生死無涅槃之名耳。二云。真諦涅槃俱無名無相。名相所不及。言語道断心行処滅。引肇論江河競注而不流。日月歷天。而不周。豈有名於其間哉。三云。真諦無名。仏果涅槃雖復冥真。猶是統待二仮。故涅槃不得無名也。

初家真俗俱有名。第二家。真俗

第三明絶名。古來明真諦与涅槃絶不絶。凡有三説不同。一云。二皆不絶。真諦有真如實際之名。涅槃有常樂我淨之稱。而言絶者。乃絶生死世俗患累之名。若見美妙之名則不絶。第二明二種皆絶。真如本自寂絶布微非名所及。涅槃亦尔。言語道断心行処滅也。第三師云。真諦絶涅槃不絶。是俗諦乃有則真義尚論。涅槃終是俗諦是統待二仮。莊嚴明涅槃二諦攝。開善明是俗諦攝。故不絶。

今次第難之。難第一家。真諦涅槃

俱無名。第三家。真無名俗有。名。

応更有第四家。執真有名俗無名。

未見執者。若定執此墮四倒見。

(大正三八・四)

涅槃皆不絶。則違經文。經云。涅槃非名。強為之名。又云。非名非相非待非不待。云何言不絶耶。若言涅槃無生死之名為絶者。亦生死無涅槃名。生死亦絶。若互無為互絶者。亦互無絶。若互無為互絶者。亦互無絶。不可互絶耶。互絶耶。又肇師依涅槃論。明涅槃無名。云何涅槃不絶。斯則乖闕河旧説。復違涅槃正文也。難第二解。明涅槃断言語絶心行。無名無相。所以是絶者。亦不然。若涅槃絶同真諦絶者。亦涅槃同真諦頑。涅槃不可同真諦頑者。則涅槃不可同真諦絶。第三師云。真諦絶涅槃不絶者。亦不然。若真諦絶涅槃不絶者。真諦妙涅槃不妙。真諦空涅槃不空。二種皆空則二皆絶也。彼云。真諦妙無涅槃。妙有二種。有無雖異而是妙。既皆妙則應皆絶。一絶一不絶則一妙一不妙也。

(大正三八、一三四)

これは同じ素材を依用しながら吉蔵の絶名論を灌頂は無名

灌頂撰『涅槃經玄義』における「有る人」とは誰れを指すか(河村)

論の位置において論じ、灌頂はこの後、仮名論、絶名を論じて己れの学説を優位においた一例である。

(二)涅槃の体について

第二釈涅槃體。先出旧解。莊嚴云。仏果涅槃出二諦外非真俗撰。凡夫以惑因感果。是浮虚世諦。假体即空故是真諦。仏果非惑因所感。故非世諦。不可復空。故非真諦。引仁王經云。超度世諦第一義諦。住第十一薩雲若地也。開善云。仏果涅槃還為二諦所撰。体是統待二仮。故是世諦。即此二仮可空故是真諦。仏果靈智亦復冥真也。冶城秀云。仏果涅槃非世諦。是真諦。微妙寂絶。故云世諦死時名生不生。竜光云。仏果涅槃具相統相待二仮即世諦。乃即真之義而不冥真。若冥真同頑境。即無靈智故非真諦也。

次二法明体者。則是二諦義。莊嚴云。涅槃出二諦外。明惑因所感果是浮虚之故是世諦。假体則空故是真諦。今仏果非惑因所感。故非世諦。非世諦故不可則空。故非真諦。所以仁王經云。薩雲若覺超度世諦第一義也。開善解云。果涅槃具足二諦。涅槃是統待二仮故。是世諦。非但則真亦復冥真。故是二諦。第三冶城師云。仏果非世諦則是真諦。明真諦是諸法之本。但衆生顛倒起惑構造生死。遂成世諦。今還脩道断惑生死尽世諦則滅。世諦既滅還歸本真。譬如清水本性際靜。仮外風漸鼓擊致有波浪。風若息還取本性。

撰仏果是亦有為亦無為。若仏果是真諦。真諦不可説。於衆生無用。若仏果是俗諦。仏果一向是有為。此皆成論師説。自相矛盾不愜人情。亦不称肇論。論云。不可形名得不可有心知。言之失其真。知之反其愚。有之乖其性。無之傷其軀。肇意推之墮在四見。仏法辺外尚非小涅槃門。况小涅槃體。尚非小涅槃門体。焉得是共別涅槃門体。尚不是共別門体。何得是大涅槃体耶。經云。是諸人等。春陽之月。乘船遊戲。失瑠璃宝。即共入水。競捉瓦石歡喜持出。都非真宝。是珠澄淨清淨故。在水中猶如仰觀虚空月形超然独遠。非衆人所執。亦非衆首所触。古來復約三聚論涅槃體。言仏地一向有心聚。一向無作聚。色聚亦有亦無。無麁色有妙色。引經因滅是色獲得常色。六卷云。妙色湛然常安隱云云。又一解。色是頑闕。不可研進。故仏

待。非撰非不撰。豈可定言撰不撰耶。故肇師云。涅槃之為道也。寂寥虚広不可形名得。微妙無相不可有心知。言之者告其真。知之者反其愚。有之者乖其性。無之者傷其軀。斯乃希夷之境太玄之郷。而以有無題榜標其方域。而語神通者不亦邈哉。涅槃之体乃其如此。豈可以凡心推度或言在二諦内或言在二諦外耶。次明三德者。明三法有三種。一者三聚。二者三性。三者三德也。三聚者色心無作。今不釈此名。但仏果為具此三不。成論師解。此有三例。若是心則定有無作。定無色。一種則有多解。一云。仏果乃尺鹿色。則有妙色。故經云。捨無常色獲得常色。又六卷云。妙色湛然常安穩。又經云。解脫有二体。一色二無色。無色者声聞解脫。色者諸仏解脫也。第二云。

地無色無無作。唯有靈智獨存。經道色者能應為無窮之色。又妙果顯現義說為非色。引文願諸衆生滅一切色。入於無色大般涅槃。

(不説)

又分別兩界有色。一界無色。又四空無色者無麁色耳三界並有色。界外交易則無色六地已還身在分段。故有色。七地已上身在界外則無色。

又七地是兩國中。猶有光影色。八地已上則無色。

又言金心猶有色。故經言。意生身者雖無一期壽命但有念念生滅名為變易。故言意生身。身者猶有色也。唯仏地無復色耳。無作者金剛已前皆有無作。唯金心無心無無作也。

灌頂撰『涅槃經玄義』における「有る人」とは誰れを指すか(河村)

仏果無色。色是頑礙之法不可研磨。增進仏果之時靈智獨存無有色与無作也。而經中道妙色者有二義。一能應為無窮之色。二者妙果顯現故。故為色耳。故六經云。願諸衆生滅一切色入於無色大般涅槃也。

地論明三仏皆有色。……

又常釈色至処者。成論師凡有四説。一欲色兩界有色。無色界無色。第二云。三界並有色。三界外乃無色。何者六地已還身土分段有色土。七地以上出三界外無復色。而是四空無色者無麁色耳。

第三解云。六地穢国土地。二國中間猶有如影知光色。八地已上則無復色。

第四解。金剛心則有色。唯仏無色。而言界外意生身者爾時無復一期壽命。但有念念生滅名為變易。故云意生身耳。無作一法窮至金剛也。

有人難此義。若涅槃定有色。応有長短質像。須依食住処。若定無色心無所依。豈可有心而無色。若色頑。須離心是取相。得意不離。

如是等釈皆是妄語。猶如盲跛見仏。亦盲跛王語諸臣我庫藏中無如是刀。不須多難也。

(大正三八・七b—八a)

今明皆不然。若言仏果定有色者。則應長短。質像則有処所。若定無色亦應無心。何者色是心依因既無有色。心何所依。若言色是頑礙故須離者心是無常。亦應須離。又心是取相之法。亦應須除。若取相心為無相心者。亦應轉頑礙之色為無礙色。又歎如来無色應為色者。亦無心應為心。

解云。心為体。汝何心為体。汝捨麁心以妙心為体。応捨麁色妙色為体也。今明。若言一切皆無。是無不待於有。是故性無有亦然也。故今有乖無。無不妨有。有無自立色心無礙也。

(大正三八・一三五c—一三六b)

ここには二回ほど「有る人」の説をあげている。  
○有人難此四解……  
今皆不レ同此説……  
○有人難此義……  
今明皆不レ然……  
この対応関係から、「有る人」は吉蔵を指していると理解でき。但だ「有人四解」の四解は、吉蔵は三解のみで竜光の

灌頂撰『涅槃經玄義』における「有る人」とは誰れを指すか（河村）

(大正三八、八a)

復道は善。故云諸惡已斷善善善會。

(大正三八、二三六b c)

説をあげていない。然し吉蔵の指示する二諦義中に竜光の説があり、ここは二諦義をも参照したものと解釈しておく(『二諦章大正四五、一〇五a b参照)。

これは玄義と遊意とがほとんど同文である例として掲げたものの一つである。

#### 四涅槃の用を積するについて

古來復約三性。明涅槃體。言仏地一向是善性。一向非惡性。無記性亦有亦無云云。光宅云。常住仏果。有兩種無記。一知解無記。二果報無記。如棋書射御。闡提亦有故非是善。仏地亦有故非是惡。即是無記性也。果報者。如生死苦無常報。既非是惡。只是無記。涅槃地常樂我淨亦非是善。直是無記。開善莊嚴並言。仏無無記。唯一善性。知解無記。有多積。莊嚴云。是善性。開善云。通三性。在闡提是惡。在仏是善。在余人是無記。言果報者。生死中多有異具故。果報可是無記。仏果報何以是無記。仏果唯一習果無復報。法豈得類此は無記。以習善既滿。併成習果也。

第二顯三性明體。三性善惡無記。積此三亦三例。善一向定有。惡一向定無。無記復有二解。第一光宅明仏果有二種無記。一知解無記。二果報無記。知解者如基射馭。闡提亦有故非善。仏地亦有故非惡。故有無記性也。果報者如生死中苦無常。積既非惡但是無記。涅槃之地常樂我淨亦非是善。並是無記也。

第二開善莊嚴並云。是善非復無記。次通彼二種無記之善。莊嚴明知解應是善。開善通三性。闡提是惡。仏則是善也。…果報可是無記。仏果唯有習果。無復報法。寧可類此は無記耶。今所明涅槃之體。非善非不善。非記非不記。無一定相。善巧方便無所不是善不善。有時為對不善。如

第四積涅槃用者。為三。一本用。二當用。三自在起用。本用者。先出旧解。靈味小亮云。生死之中。本有真神之性。如弊帛裏黃金像墮在深泥。天眼者提取淨洗開裹。黃金像宛然。真神仏体万徳咸具而為煩惱所覆。若能斷惑仏体自現。力士額珠。貧女寶藏。井中七宝。闍室瓶盆等喻亦復如是。此皆本有有此功用也。新安述小山瑤解云。衆生心神不斷。正因仏性附此。衆生而未具万徳必當有成仏之理。取必成之理為本有用也。開善莊嚴云。正因仏性一法無二理。但約本有始有兩時。若本有神助。有當果之理。若能修行金心謝。種

次第五明涅槃用。就此亦有二義。一者明照境用。二者明発智用。今第一明本有用。但前已略明本有義。此義未顯。今更広明之也。然古來有三解。第一靈味高高生死之中已有真神之法。但未顯現。如蔽黃金。如來蔵經云。如人弊帛裏黃金像墮泥中。無人知者。有得天眼者。提淨洗則金像宛然。真神亦爾。本來已有常住仏体。万徳宛然。但為煩惱所覆。若斷煩惱仏体則現也。次有鄞安瑤師云。衆生有成仏之道理。此理是常。故説此衆生為正因仏性。此理附於衆生。故説為本有也。第三開善具有二義。一者本有。二者始有。更無二

覚起名為始有。始有之理本已有之。引如來性。貧女額珠闍室等。証本有。引師子迦葉明乳中無酪。但酪從乳生。故言有酪。酪非本有。必俛醪暖。種植胡麻。答言有油。油須擣庄乃可得耳。又引仏性。三世衆生未來當有清淨莊嚴之身。此証當有。雙取二文意。与瑠師不異。又引木石之流。無有成仏之理。則非本有之用。衆生必応作仏。今猶是因。因是本有。果是始有。本有有始有之理。即是功用義也。

有人難初義。若言衆生身中。己有仏果。此則因中有果過。食中己有糞。童女己有兒。若己具仏果何故住煩惱中坐不肯出耶。何故不放光動地。故文云若言有者。何故默然。正破此執耳。次難第二有得仏之理。此理若常為相統常。為凝然常。若相統常

灌頂撰『涅槃經玄義』における「有る人」とは誰れを指すか（河村）

体。但將両義成定之耳。欲明不有神明定若有神明。則本來有當果之理。此本有義但約万行円満。金剛心謝種覺起時。名為始有。大經具有二文。如貧女宝蔵力士額珠闍室瓶罇井中七宝。本自有此。証本有之文。下師子吼及迦葉品中皆以乳酪為譬。明乳中無酪。但酪從乳生故言有酪。又云仏性非三世攝。但衆生未聚莊嚴清淨之身。故説仏性在於未來。此則証始有之文。故知仏性具有兩義。若定木石之流無成之理。此衆生必応作仏則本有義。若於仏則今利是因中。因中未有果則始有義也。今並不同。

且破第一義。若定本有真神則同僧佉\*。又若因中己有則同壳乳索酪備貨草馬索駒直也。又真神力大。何意住煩惱中。而不能排煩惱出。而待修道斷惑乃得出耶。破第二義解。若得仏之理己自是常。則衆生身中己有常住之法。

何謂本有仏果之理。若凝然常則因中有果。過同於前。難第三家。若言本有具始有。亦応本有常住。復有無常。本有只得是常不得無常者。本有只本有。那得有始有。又若本有有始有。亦応無常有於常。無常不得有於常。本有那得有始有。又本有有始有。則了因有生因。若了因了本有是常。生因生始有是無常。不得相有者今本有那得有始有耶。鷓蚌相扼。更互是非。由來久矣。

(大正三八、一〇ab)

還成常見之執。非真神之法。若此理無常則不成本有之義。次破第三開善解。具二義。汝言常住之法常有始有者。亦応常住之法。有會有今。若有會有今。則墮三世成無常。反結云。又難。若常住之法復有始有之義者。亦応無常之法。応無本有之義。若無常法。但有始有無本有者。則常住法但是本有。無始有也。又常住之法具二義者何因所耳。本有之義須耳。因了出始有之義。復為何所感。若無別因則応無別有。既有二有則便両因。若從生因則無常也。

(大正三八、二三七c)

一一三八a)

\*大正藏經は法に作る今は法の字とする (著者)

ここに一回「有る人」を挙げている。玄義の「有人難初義……」に対応するところの遊意は「且破第一義……」という。遊意の文は吉蔵の自説であることは明瞭であり、全文の対応よりこの「有る人」は吉蔵に間違いない、灌頂が吉蔵を

「有る人」としてあげたところである。

(五)涅槃の当有の用を釈するにおいて

当有用者先出旧解。解有三。一云理出万惑之外。須除惑都尽。乃可見之。譬十重紙裏柱。雖除九重終不見柱。併尽乃見。二引漸備經明一切智慧皆漸漸滿。不可一期併悟也。三云真諦可漸知。仏果可頓得。何者即俗而真。更非遠物。所以真可分知。仏果超在惑外。不即生死故。不可漸知。

有人難初義。若理不可漸見惑豈可漸除。既不見理由何除惑。若言理可漸見。夫理若是分。可作分知。理既円通。若為漸解。若初見称後見。与後無異。不名漸見。若初不称後。不名頓見云

云。

(大正三八、一〇c)

通同無分。那可分知。又責初地見真。以為称理。為不称理。若已称理与二地何異。若未称理。何謂見理。第三家具招二難。又且二語自相反。故不可。

(大正三八、二三八c)

次明仏果涅槃發智用。問仏果涅槃為当漸知為当頓知。古來解不同。拳真諦对明凡有三説。一云二種皆頓智。不可漸見。何者理既在万惑之外。雖除一面分。終不見理。要須除惑尽理方可見也。十重紙裏物。除九重終不見。除尽方見。第二解云。二種皆可漸知。故漸備經明一切智慧皆漸漸満足。豈可一朝併悟耶。第三解云。仏果頓知。真諦可得漸知。所以爾者。真諦則俗之空。更非遠物。所以得智慧。即可分知。仏果智出生死之外。所以不可漸知。

今謂此之解皆不可。初云皆頓知不可者。汝既都未見理。亦応都未断惑。若少分断惑則応少分見理。又且不見理則無智慧。無智慧以可除惑耶。次皆漸知不可者。明理若有分可得分知。理既

ここにも一回「有る人」をあげている。玄義の「有人難初義……」に対応するところの遊意は「今謂此之解皆不可。初云……」というものである。この場合も灌頂が吉蔵の所説を「有人」としてあげたものであるといつてよい。灌頂は吉蔵の所説の取意をもつて簡潔にまとめしており、第三説は「云云」としている。

玄義はこの後、涅槃の照境の用を論じている(大正三八、一一a-c)。このところは吉蔵の遊意と長文の間、対応する(大正三八、二三八a-c)。

### 三 玄義の「有る人」の指示において

今、前述のように、灌頂の涅槃經玄義と吉蔵の涅槃遊意との文章の比較上の問題より玄義の「有る人」を見て来た訳である。以上の結果は、

一、前記に掲げた文例の如く、両者の対応関係は成立しうること。

二、玄義の「有る人」は遊意と対応関係のところにおおく存在すること。

三、その中であつて「有る人」は例外なく吉蔵の説と理解して何ら差支えないこと。

四、周知のように灌頂と吉蔵とは同時代の人であり、かつまた吉蔵は灌頂より十余年先輩であるから、灌頂が吉蔵の所説を参照したとしても不都合は生じないこと。

以上の諸理由から、今は右の玄義の「有る人」を吉蔵と指示し、このことと併せて灌頂は吉蔵の遊意を、またその周辺論書をも参照して玄義を著わしていることを論証できらう。

(東洋大学東洋学研究所専任研究員・文博)

新刊紹介

高崎直道著

「仏性とは何か」

四六判・本文二三五頁・定価一六〇〇円  
法蔵館・昭和六十年二月十日刊

灌頂撰『涅槃経玄義』における「有る人」とは誰れを指すか(河村)